

野幌森林公園ではアライグマは生息区域を拡大  
(平成27年度野幌自然環境モニタリング調査結果概要)

1. 調査項目及び内容

調査項目	内 容
森林植生	再生活動地における天然更新及び植栽木の再生状況を把握。また、野幌森林公園において良好であると考えられる林相を有する天然林（以下、「良好な自然林」とする）の概要を把握する。
菌類相	風倒被害地、良好な自然林、風倒被害を受けなかった森林において出現する木材腐朽菌の子実態を採取・同定し、森林の再生段階を菌類の面から権等を行う。
歩行生甲虫相	風倒被害地、林縁、林内において歩行性甲虫を捕獲し、得られる種から風倒被害地の再生段階を検討する。
野生動物相	自動撮影装置を用いた調査を実施し、森林の更新に影響を及ぼすと考えられるエゾシカ、特定外来種であるアライグマ、その他記録される野生動物から、野生動物相の健全性について評価を行う。

2. 調査結果

1) 森林植生調査

再生活動地の植栽木は着実に伸長成長を増し、トドマツ、ヤチダモも成長が著しい。天然更新木も種数や樹頂を増やしていくものと考えられ、再生段階は「第2段階」と考えられる(図-1)。

また、良好な自然林として最大胸高直径:66.6cm、最大樹高:34.1mのハルニレがあるトドマツ・ハルニレ混成林を調査し、林分概要を把握した。

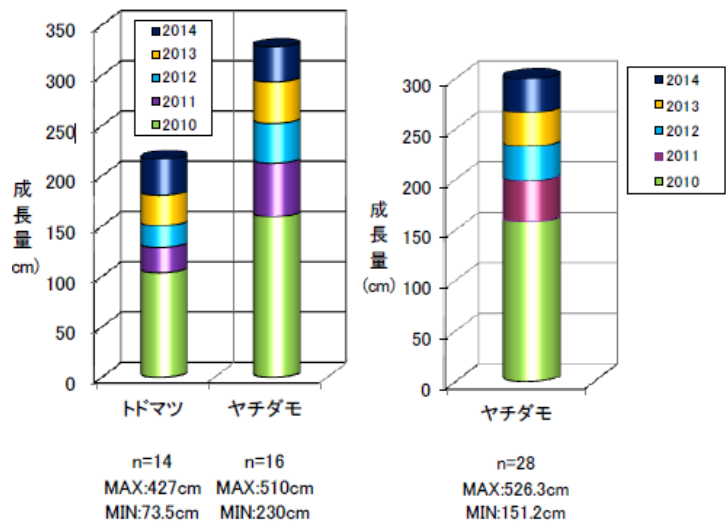


図-1 植栽木の成長量

2) 菌類相調査

処理区において出現頻度に変動が見られた種に着目すると、カワラタケやレンゲタケなど出現頻度が減少し、天然林区や人工林区の様相に近づきつつある種もあるが、種構成は天然林区や人工林区とは異なっている。倒木などの腐朽の進行、根株等の菌類の発生環境の乾燥傾向が見られてきているが、再生段階としては「第1段階」と考えられる。(表-1)

表-1 主な菌類の出現傾向

種名	処理区	天然林区	人工林区
ウスバシハイタケ	ピーク(H20)	低	高
スエヒロタケ	減少傾向		低
カワラタケ	ピーク(H19)		低
トドマツガンシュビヨウキン	減少傾向		低
アラゲカワラタケ	減少傾向		低
レンガタケ	ピーク(H22)		低
モミサルノコシカケ	低	低	中
サカズキカワラタケ	低	中	低
キカイガラタケ	ピーク(H20)		低
キアシグロタケ	なし		低

### 3) 歩行性甲虫相調査

台風被害で生じたギャップに侵入した非森林性の歩行性甲虫の割合は平成19年がピークであり、その時期が森林の中に異質な群集が入り込んだ時期と判断される。それ以後徐々にギャップエリアの群集も周囲の森林群集に近づきつつあり、回復している。

種数の減少傾向が収まってきていることとCH指数の増加傾向がやや収束してきていることから、穏やかに森林回復に向かっていていると判断され、再生段階は「第2段階」であると考えられる

(図-2)。

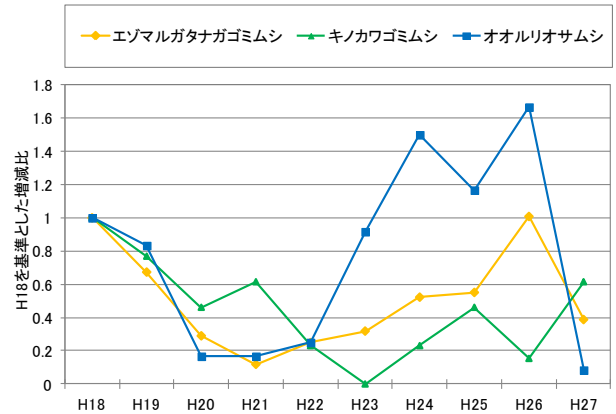


図-2 良好な森林環境を好む甲虫類の捕獲数の推移

### 4) 野生動物相調査

自動撮影装置による撮影頻度は、哺乳類の数、種類ともに前年度までの調査結果と大きな違いは見られず、生息する哺乳類相に目立つ変化はないと考えられる。特定外来種であるアライグマについては、今年度も過年度同様、広範囲で多数確認された。また、撮影頻度は平成24年度以降減少傾向にある。エゾシカについては、撮影頻度はあまり高くなく、現段階では森林への影響はまだ少ないものと考えられる(図-3)。

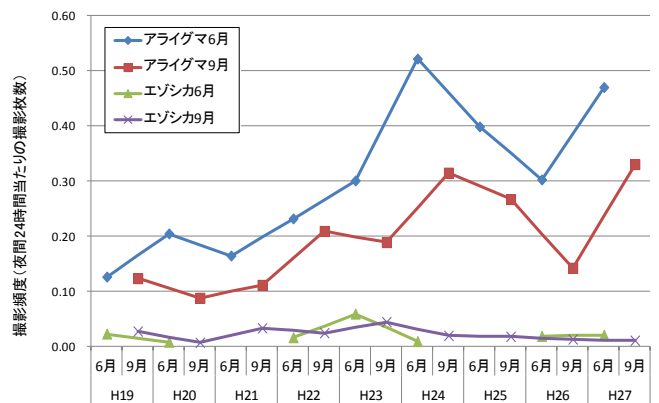


図-3 アライグマとエゾシカの撮影頻度の推移

環境省レッドリストで準絶滅危惧種とされているエゾクロテンが今年度も確認された。

野幌森林は、石狩低地帯の西側では本種の生息が確実な数少ない箇所であると考えられ、今後の動向が注目される。

問い合わせ先：北海道森林管理局 石狩地域森林ふれあい推進センター  
 〒064-0809 札幌市中央区南9条西23丁目1-10  
 TEL011-533-6741 E-mail:h\_ishikari\_f@maff.go.jp